



W.A. Mozart Hiroba

「モーツァルト広場」 SINCE 1995

第51号

## 照れ笑いのモーツァルト詣で

モーツァルトへの手紙 (その27)



会員番号 K.618 加藤 明

今年の12月22日(日)のアニバーサリー・例会をもって【モーツァルト広場】はその30年に及ぶ活動の幕を閉じることになりました。この日は、長い間献身的にお世話を頂いた名誉会員、久元祐子さんに記念演奏を特別にお願いしております。

昨年の12月のアニバーサリーで初めてご出席の会員各位にこの閉幕のお話をしました。

その後、多くの会員の皆さんから「まだまだやりましょう!」、「どなたか引き継いでくださる方はいないんですか?」といった継続を促す温かいお言葉をいただきました。

その都度、胸が熱くなり心苦しい思いを懐きました。「ものごとには、始めがあれば終わりがあります。生があるから死があるように。終わりの潮時を感じ取り決行するのもやり始めた人間の責務でしょうから・・・」と、己に言い聞かせるように釈明してきました。

【モーツァルト広場】はピーク時には100名を超える会員が在籍しておりました。

「珍しいナマのモーツァルト」を愉しんできた物故会員はすでに10名を超え、幹事スタッフの欠員補充もままならないという深刻な高齢化の波が押し寄せてきてしまいました。

そんな中、かつて会員でもあった小生の次兄Hが今年の2月に他界しました。享年76。

少し、早すぎる感はありますが、長兄が62歳で亡くなっており、そう考えると長寿?の方でして、末子の小生にも近々お迎えが来る・・・と連想される身近な事件でした。

その兄が一度だけ、2003年12月発行第11号の会報に寄稿したことがありました。

当時の彼の会員番号はk.331の「トルコマーチつき」のピアノソナタでしたが、在籍期間の短かった兄の一度きりの寄稿文で、愚弟はその事実を忘れかけておりました。

彼の病状が重篤になるにつれ、ふとその寄稿文が載っている会報を思いだし、捜しながら手にし、ドキドキしながら読み返してみたという次第でした。

そこには彼がモーツァルトに向き合うきっかけをつくってくれた映画《アマデウス》との出逢いが書かれていたのですが、その他に物好きな父が当時流行りの8ミリカメラで撮り収めた田舎の冬景色のBGMに、さりげなく「トルコマーチ」を使っていたことを子供心に記憶していたという一節があり、なんか面白い話だな

あ・・・、といっとき感慨にふけたものでした。

父は元来民謡や歌謡曲などを器用に歌いこなす才覚?があり、興にいと人前で自慢気に「秋田おばこ」や三橋美智也を謡ったりするちょっとした田舎の芸人であったのです。

しかし、兄も小生も父がモーツァルトいや「トルコマーチ」にも何らかの思いを懐いていたとするなら、一度でもいいから父のモーツァルト談義を直に聴いてみたかったと思ったわけなのです（いったい、誰が弾いた「トルコマーチ」だったの?などと・・・）。

昭和30年代のモーツァルトは音楽愛好家の父にどんな風に受け容れられていたのだろうか? もっとも昭和43年の正月に、50歳にも満たない若死にの父ですから、高校生の小生には叶わぬことでしたが、今さらながら果たせぬ探検心が刺激された8ミリカメラによる田舎の冬景色に違いありません。



小生は高校一年生の夏、日当たりのいい縁側にあったステレオから流れるA・シヴィルがクレンペラーと協演した「ホルン協奏曲一番k.412」を偶然耳にして、『さわやかで、はじめて聞いたとは思えない、懐かしい音楽だなあ・・・』と感じ入った記憶があります。

これが小生におけるW・Aモーツァルトとの出逢いの嚆矢と言えるでしょう。

この時、件のレコードをかけてじっくりと聴いていたのは兄Hその人でしたので、今にして思うと後年、小生がモーツァルトに酔心することになる種を蒔いたのは誰あろうこの兄Hだったことになります。

ところが、偶然のことながら、小生に「モーツァルト詣で」を促した当の兄Hはといえば、その当時から最期の最後まで実はベートーヴェ

ンの崇拜者であり続け、言うならば、私設ベートーヴェン教の幹部信者であったのです!

つまり、たぶん当時の兄は所謂クラシックの世界に足を踏み入れたばかりで、様々な作曲家の著名な曲を探検し、渡り歩いては日々愉しんで聴いていたに違いないのです。

そして方々に巡礼していく過程で、彼にとつての「本命」ベートーヴェンに辿り着いた、というのが本当のところなのだろうと推察しています。

では、何故ベートーヴェンなのか!? 兄Hにとってベートーヴェンとは何か!?

残念ながら兄Hからはベートーヴェンへの拘りの理由を一度も訊いたことがなく、たぶん、訊いても明解な返答は得られなかったのでは・・・?と推測するのです。

正に誰しもが「彼女のどこが好きなの?」という問いかけの球にクリーンヒットで打ち返すことができないように・・・。

それでも小生なりに兄Hのベートーヴェンにハマってしまった理由を考えてみました。

その結果、即座に思い浮かぶ納得できる理由の一つとして、ベートーヴェンの楽曲全般に浸透する「力強い説得力」が上げられると思われました。

それは、上質の「繰り返しがもたらす説得性」と言い換えられる質のものです。

時代背景はともかくとして、音楽としての「説得力」、聴く者を圧倒するようなダイナミックとでも言えるようなベートーヴェンならではの特性が、己の思いを言いたくとも言えない兄を捉えて放すことがなかったのでは、と思われるのです。

もっと言えば、きっと他人を説得することは元より、人前で話すことすら苦手な兄の

思いを的確で豊穡な表現力のベートーヴェンが代弁してくれているような、そんな救世主のような存在だったのではないか・・・？

こうして兄Hの目線を通してベートーヴェンに接近してみると、14歳ほど年上にあたるモーツァルトとは随分と曲想に隔たりがあることに今さらながら思い至るのです。

当然のことながら二人の生存期間（モーツァルト35年、ベートーヴェン56年）や、フランス革命の勃発（貴族社会の凋落化）、ナポレオンの台頭と没落などの歴史的な変遷などが必然的に作曲家としての二人に多大な影響を与えていると考えられます。

そこで発せられる音楽はその時代の世情・背景からは逃れられない、という真実を認めざるを得ないのでから。



兄Hが21歳当時鉛筆で描いたベートーヴェン

それにしても、ベートーヴェンにおいては若くして耳病から遺書を書くほどの苦難を乗り越えるという凄まじい生きざまを振り返るまでもなく、克己心猛々しい実存性が特徴的で、誰しもがモーツァルトとは一線を画する重厚さと躍動感を感じとるわけです。

ひょっとしたら、兄Hは幾多の苦難を超越し

て「第九」までたどり着いたベートーヴェンを中心に底から偶像として崇めることで「生きる活力」としていたのかも知れません。



昨年の7月に、久元祐子さんの「ジュノム」（ハイドンフィルとの共演）を紀尾井ホールで聴きましたが、これが兄と二人で愉しんだ最後のモーツァルトとなってしまいました。

視聴後は小生を東京駅まで見送ってくれた兄H、いつもながら多くを語ることはなかったのですが、兄にとってはナマの「ジュノム」は初めてということもあり、ペーゼンドルファーによる久元女史の素敵な演奏とその余韻にしばらく浸っている様子でした。

ところで兄の会報への寄稿にあった「モーツァルトへの接近」のその後の実情はどうであったのだろうか・・・？

今となっては知る由もないのですが、昨年の【広場】のサマーコンサートでの「クラリネット五重奏曲」を視聴後に垣間見せたあの特有の満足げな様子から、何やら再接近のきっかけを得られたように感じられたのですが・・・。

互いに「兄弟」という選択できない宿命を背負いつつ、それぞれが年齢を重ねる過程でモーツァルトに共感できたこと、そして、兄が喜寿を迎える直前まで「気負いのない対話」という濃密なこころの交流ができたこと、このことは兄の永い不在による寂しさを消去させるほどの望外の喜びとなって小生を包み込んでいます。

そして、あちらの世界で「モーツァルト詣で」を始めているであろう兄Hの照れ笑いが脳裡をかすめるこのごろなのです。

End

## オペラ「魔笛」の成立（上） —フリーメーソンとゾロアスター教—

会員番号 K.203 松田 至弘

\*

2013年の9月に、河出書房新社からモーツァルトを特集した『文藝別冊』が刊行された。そのなかに、作曲家の池辺晋一郎氏とドイツ文学者の池内紀氏の対談が掲載されている。

注目すべきは、この対談の終盤で、池辺氏が池内氏に次の質問をしている点である。

「そうだ、僕とまったく視座の違う、手紙などに詳しい池内さんに、質問があるんです。モーツァルトとフリーメイソンの関わりは、どういうふうだったんですか。たとえば、『魔笛』に出てくるザラストロはゾロアスターだと言われていますが、ゾロアスター教＝拝火教との関わりはどうだったのでしょうか。」



「魔笛」  
のDVD  
(1982年  
ザルツブルク音楽祭)

この質問に対する明確な答えは見られないが、池内氏はモーツァルトが「はっきり自分か

ら意識的に」フリーメーソンの会員になったこと、ゾロアスター教が「当時の知的流行」だったこと、当時、「火が啓蒙の武器になって」、「ゾロアスターが秘密結社のなかに取り込まれて、ヘンに怖いものというイメージが出来上がっていった」ことを指摘している。

池辺晋一郎氏の質問の答えは、モーツァルト・ファンなら誰でもが知りたいことであろう。そこで本稿では、「オペラ《魔笛》の成立」というテーマを設定して、フリーメーソンとゾロアスター教という観点から考察してみることにしたい。

\*

ゾロアスター教については、一般的にあまり承知されていないので、先ず、この宗教の地中海方面・ヨーロッパへの伝播について、順序だてて記してみよう。

ゾロアスター教は、古代中央アジアの原始アーリア民族の間に生まれた宗教である。教祖はザラスシュトラ・スピターマ（アヴェスター語）であるが、その在世年代は紀元前7世紀、または紀元前6世紀とも言われはっきりしない。

何世紀も経てゾロアスター教は、ササン朝ペルシア（224～651）の国教になり、聖典『アヴェスター』が編集され教義も次第に確立した。その後15世紀に、ビザンツ帝国の学者ゲオルギオス・ゲミストス（1355頃～1450、プレトンという筆名を持つ）を通して、プラトンの思

想などと共に西伝したと言われている。

それでは、ゾロアスターの人物とその宗教的教理内容、歴史的背景などが正確に伝えられたのかというと、決してそうではなかった。伝わったのは、実像とは違うゾロアスター像であり「東方の賢者」のイメージであった。

こうしてゾロアスターは、ルネサンス期文化人の関心の的になり、以後ヨーロッパの知識人たちによって理想化され権威づけられて「虚像のゾロアスター像」が語り継がれることになったのである。

音楽の分野ではフランスの代表的オペラ作曲家ジャン・フィリップ・ラモー（1683～1764）が、ルイ・ド・カユサク（フリーメーソンであった）台本のゾロアスターを主人公にした異色の作品「ゾロアストル」を1749年に作曲し、パリ・オペラ座で公演が行われた。



ラモー作曲のオペラ「ゾロアストル」

さらに、その大幅な改訂版が、1756年に同じくオペラ座で上演され大成功を収め、傑作オペラとして広く知られるようになった。

モーツァルトは少年時代、家族による西方大

旅行（1763年～66年）の帰途、ブルゴーニュの領主コンデ公から招待されたが、公からディジョン出身のラモーのクラヴサン（チェンバロ）曲の譜面を見せられ、公の楽団の舞踏音楽演奏を聴いている。また、リヨンでのコンサートでは、姉と共にラモーの曲を演奏したりしている。

ラモーは1764年にパリで死去しており、モーツァルト一家がこの音楽家と顔を合わせる機会にはなかった。とは言え、この時かあるいは後に、モーツァルトがオペラ「ゾロアストル」について知ったであろうことは容易に推測できることである。

フランスでは、文学者で啓蒙思想家のヴォルテールらがゾロアスターに熱い関心を寄せ、キリスト教会の矛盾や封建主義を批判するために利用している。

\*

ドイツ語文化圏のフリーメーソン界、思想的に同じ潮流の啓蒙主義者の間では、ゾロアスターは高潔で叡智を秘めた人物として高く評価された。

モーツァルトは、ザルツブルク時代からフリーメーソンの友人やメーソンの音楽と接していたが、1784年12月、ウィーンのフリーメーソン結社のロッジ「善行」に入会した。（1785年にウィーンのロッジが再編されると、「新授冠の希望」へ）非常に熱心なフリーメーソンであり、イグナーツ・フォン・ボルン（1742～91）の創立したロッジ「真の和合」などにも出入りし、同志から愛され信頼された。

モーツァルトがフリーメーソンに深く共感したのは、この結社が偏見と迷信の打破や自由・平等・友愛・慈善などの啓蒙主義的・理想主義

的考えを標榜し、また、神秘主義的要素をも取り入れていたからであろう。

このような状況のなかでモーツァルトは、東方の賢者ゾロアスターについても心惹かれたことがわかる。

1786年2月にモーツァルトは、ホーフブルク（宮廷）舞踏会場での仮面舞踏会に、哲学者ゾロアスターに変装して参加し、自ら作った14の格言と8つの謎々を印刷したチラシを配布した。それには「ゾロアスター書片からの抜粋」と記されており、これは大きな話題を呼んだ。モーツァルトはこのチラシを父に送り、3月下旬にザルツブルクの日刊紙「南ドイツ国民新聞」に掲載された。

アメリカの音楽学者メイナード・ソロモンは、名著『モーツァルト』（石井宏訳）のなかで次のように指摘している。

「モーツァルトがゾロアスター教の東洋性に惹かれるのは、フリーメーソンのロッジや読書会の伝統に発している。それらの場所は、異国的なもの、東洋的なもの、奇蹟的なものへの関心を育てる温床だった。（ゾロアスターはのちにモーツァルトの神話＝メーソン・オペラ〈魔笛〉の中のザラストロとなって復活する。）」

シカネーダー（1780年以來モーツァルトの友人）の動向を、1783年以後について述べると、ウィーン、ハンガリーの首都ペスト、プレスブルク（現在のプラチスラヴァ）、ザルツブルク、アウグスブルクなどで興行を打ち、レーゲンスブルクでは「ドイツ国民劇場」の演劇監督に就いている。しかし、スキヤンダルにより1789年にそこを退任してウィーンへ舞い戻り、まもなく市壁の外のフライハウス劇場（免税館劇場）の支配人になった。

シカネーダーはレーゲンスブルクでフリーメーソンのロッジ「3つ鍵カール」に入会しているが、メイナード・ソロモンは前掲書において、ウィーンでもロッジ「新授冠の希望」のメンバーだったと記している。

シカネーダーは、ウィーンのロッジには所属していなかったという見解もあるが、もしそうだとすると、モーツァルトの友人として行事に招待されていた可能性は高いであろう。

いずれにしろシカネーダーが、フリーメーソンのロッジに出入りし、会員の人々と交流を持っていたことは事実である。それを裏付ける資料の一つに、イグナーツ・ウンターベルガーの油彩画「ウィーンのフリーメーソンロッジの入会儀式」があり、それには、モーツァルトの隣に座るシカネーダーの礼装姿が描かれている。



ウンターベルガー作「ウィーンのフリーメーソンロッジの入会儀式」（油彩画の部分図）右端モーツァルト

従ってシカネーダーは、フリーメーソンの思想や儀礼などについて理解し、また、ゾロアスター教についての情報も得ていたと考えられる。これは劇団員（台本作者・役者）で、フリーメーソンのロッジに所属していたギーゼッケ（1761～1833）にも当てはまることであろう。

## モーツァルトと俳句、その交響的試論（2）

会員番号 K.504 朝吹英和

『モーツァルト広場』第36号(2016年12月5日)に私は「モーツァルトと俳句、その交響的試論(1)」と題して投稿致しましたが、(1)とあるからには(2)もあるのだろうというお声に励まされ、今回続編として(2)を投稿させて頂きました。音楽を聴いていると様々な映像が目には浮かぶ事がありますが、取り分け状況喚起力の強いモーツァルトの場合には万華鏡の如き情景が音楽の調べに乗って明滅致します。僅か十七音の俳句も如何に映像を立ち上げるかが肝要です。と言う訳で、モーツァルトと俳句のコラボレーションを吟味して頂ければ幸いです。

### フルート協奏曲第1番ト長調 K.313

私は本作の名演として忘れ得ぬ加藤恕彦(1963年)やオーレル・ニコレ(1962年)の一途に突き詰めた演奏を聴くと、モーツァルトがフルートに込めた魂に触れて私は思わず涙ぐむ事があります。能管の如き鋭い加藤のフルートと対照的に包容力の大きなニコレの演奏を聴く時、動物の骨や葦笛に遡るフルートの起源に思いを致します。人間の魂の発露である息を吹き込むフルートには作曲家と演奏家の魂の交流が感知されます。バッハやモーツァルトがフルートに託した思いとは何であったのかを想像する事も音楽を聴く楽しみの一つではないでしょうか。

行く秋はフルートそれも無伴奏 仲 寒蟬  
フルートの開く地平や冬<sup>そうび</sup>薔薇 朝吹英和

### ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲変ホ長調 K.364

第2楽章のアンダンテについて高橋英郎氏は著書の中で「この『協奏交響曲』で、モーツァルトは珍しく涙を流している」と述べておられます。(『モーツァルト366日』／白水社刊)

モーツァルトが涙を流したかどうかは別にしても深い憂いと哀しみに沈み込んだような極めて内省的な音楽です。一転した第3楽章の明るく澁漉としたロンドとの対比、鮮やかな時空転位はモーツァルトの独壇場です。

天井に吊るヴァイオリン山眠る 磯貝碧蹄館  
ヴィオロンの幽けき震へ三葉芹 朝吹英和

初冬の静かなヴァイオリン工房で乾燥中のヴァイオリンが天井から吊るされ、楽器としての完成を待っています。窓の外には薄墨の如き淡彩に包まれて鎮もる山の姿。やがて芽吹き季節と共に目覚める時に備えて眠る山と、楽興の時に備えて只管眠るヴァイオリンとの密やかな交響、静謐な時空の中で来るべき生命の予兆が感知される俳句です。

### ピアノ協奏曲第23番イ長調 K.488

暖かい春の陽射しのような明るく伸びやかなイ長調の第1楽章、嬰へ短調に転調して秋の夕暮れを感じさせるメランコリックな翳りに支配された第2楽章、第3楽章では再びイ長調の明るさに包まれ、まるで「ピアノと管楽器のための協奏曲」のように自由自在な対話を繰り広げる本作は正に「光と影の綾なす」モーツァルトの傑作です。

春の海ひねもすのたりのたりかな 与謝蕪村  
三乗の陽の煌めきや蛙鳴く 朝吹英和

### クラヴィーアのためのアダージョ 口短調 K.540

「モーツァルトがかつて作曲したものの中で最も完璧で、感覚的で、最も慰めのないものの一つである」(アルフレート・アインシュタイン著『モーツァルト』/白水社より)

久元祐子さんは「モーツァルトは、決してこ

の曲で悲劇を語ろうとしたのでもなければ、痛切な心情を五線紙にぶつけたわけでもないのだろうが、そこにはアイロニーはなく、まっすぐに見つめる視線がある。(中略) 内気で、それではにかみがちな優しい微笑みを湛えており、同時に謎めいていて、幾分の神秘を含んでもいる」と述べておられます。(久元祐子著『モーツァルトのピアノ音楽研究』/音楽之友社刊より)

モーツァルトの唯一の口短調の作品である本作はモーツァルトのモノローグとも、祈りとも思えますが、いずれにせよ無心の境地で作曲されたものではないかと思えます。そしてこの曲に耳を傾ける時、私の脳裏にはヨーゼフ・ランゲの未完成の油絵「クラヴィーアに向かうモーツァルト」に描かれたモーツァルトの謎めいた眼差しが思い浮かびます。

口短調のやうな六月けむりの木 海野弘子  
一面の口短調から蝶生まる 朝吹英和

## モーツァルト・4大オペラ礼賛

会員番号 K.332 片岡 元

エスプリ(機智)とメランコリー(憂鬱)の傑作『フィガロ』に通うこと百夜では納まらず『ドン・ジョバンニ』のためなら百里の道も歩いて行く

スタンダール『モーツァルト』あとがきより/高橋 英郎 訳

### 1. 『魔笛』との出会い

モーツァルトのオペラを観たのは高校生の頃、NHK放送の『魔笛』が最初だったと思う。

そのきっかけは、クラシックギターで、F.

ソルの作曲した『魔笛の主題による変奏曲』を練習し始めたのだが、その楽譜の副題に「『なんと美しい響き』のテーマから」と書かれてあることだった。そこで、このオペラのどこにそ

れがあるのだろうーという疑問がまず湧いたのだ。手元にスコアもない少年時代なので、しばらくは特定できずにいたが、社会人になってからTV放送された『魔笛』をビデオ録画したことでやっと判明した。

それは第一幕が終わるあたり、王子タミーノが黒人のモノスタスを撃退しようと魔法の鈴を鳴らした時に、その鈴の音に合わせて合唱が歌う25小節の旋律だった。改めて原曲を聞くと、ソルがこのメロディからインスピレーションを得て、モーツァルトの幾つかの有名な旋律を模倣した変奏曲を創り出したと思うと驚きである。

そんな思い出も絡んで、モーツァルトのオペラではこの、1982年のザルツブルク音楽祭の『魔笛』が一番気に入っている。ジェームズ・レヴァインが指揮し、タミーノがペーター・シュライヤーで、純朴・誠実な王子の役柄に適役、パミー



1982年『魔笛』ザルツブルク音楽祭

ナはイレアナ・コトルバスが歌い、清楚な感じ。エディタ・グルベローヴァが夜の女王と顔ぶれが凄かった。

ナはイレアナ・コトルバスが歌い、清楚な感じ。エディタ・グルベローヴァが夜の女王と顔ぶれが凄かった。

婚』日本公演（1980年）であった。ベームが他界する前年の演奏であること、ウイーン国立歌劇場のキャストが素晴らしいことなどで、この演奏会は現在でもかなり評価が高い。

フィガロを演じるヘルマン・プライは快活・陽気さを前面に出し、スザンナはルチア・ポップで持ち前の弾むような明るさが楽しく、

伯爵夫人のグンドラ・ヤノビッツは、気品ある憂鬱さでしっとりと歌い二幕を開けていく。筆者は後年DVDを購入して鑑賞しているが、どこから観ても楽しめる貴重な一枚である。



## 2. リリカルなソプラノとの出会い

今から20年ほど前のある朝、FM放送で、弦楽合奏に合わせて非常に美しいソプラノが部屋に満ちた。曲はベルゴレージの「サルヴェ・レジナ イ短調」。そして歌手の名前はバルバラ・フリットーリ、当時気鋭のソプラノ歌手であった。演奏データは1996年でオケはリッカルド・ムーティ指揮スカラ・フィル合奏団である。

しかし当時この歌手のことを知っている人は周囲に皆無だった。この頃混声合唱の団体に加

わっていてその仲間に尋ねてみたが皆わからな  
いと言う。孤独になった。

フリットーリは色々調べていくとムーティの  
秘蔵っ子で、1989年にオペラ・デビューしたと  
いう。すでにイタリアでは有名なデイーバで  
あった。筆者は日本ではまだ知られていないの  
かと思いつつ、しばらく私製CDで美声を堪能  
していた。いつかこういう美声をライブで聴い  
てみたいものだと思いつつ、淡い期待を持ちながら。

### 3. 海外オペラで4大オペラ体験

それから数年が過ぎて、日本舞台芸術振興会  
が主催する海外オペラの引越公演というものが、  
毎年秋に上野の東京文化会館で行われているこ  
とを知った。そしてこのようなオペラ公演なら、  
モーツァルトの本格的なオペラも観ることがで  
きる！という思いが次第に強くなって、出費が  
嵩むことを覚悟しつつ、この公演に行くことに  
した。

その最初の機会が実現したのは、2007年公演  
の『ドン・ジョバンニ』で、バレンボイム指揮、  
ベルリン国立歌劇場管弦楽団という、モーツア

ルトファンとして垂涎の組み合わせであった。

その期待通り、本場のオーケストラとソリス  
トの実力をしっかりと見せつけられた、稀に見  
る感動体験であった。(これについては会報第  
19号に寄稿させていただいた。)

翌2008年は『コジ・ファン・トッテ』で、ムー  
ティ指揮、ウイーン国立歌劇場管弦楽団と豪華  
版が続くのであるが、さらに幸運なことに、か  
のフリットーリがフィオルディリージ役で登場  
したのである。妹役になるドラベッラはアンゲ  
リカ・キルヒシュラーガーで人気・評価の高い  
メゾのベテランで、とりわけ二重唱は素晴らし  
いものだった。

苦節10年ほど、かつてFM放送で耳にした美  
声。それが縁のように音の糸が繋がったよう  
で、感慨もひとしおであった。

そして、この海外オペラ公演によって、『フ  
イガロの結婚』(ウイーン国立歌劇場 2016年)  
と『魔笛』(バイエルン国立歌劇場 2017年)を  
観ることができて、ついにモーツァルト4大オ  
ペラを各々定評のある歌劇場の公演で観ること  
ができたのである。



#### 4. オペラ礼賛—モーツァルトの愉しみ

器楽曲などでよく評されるモーツァルトらしさ、例えばアレグロ（駆け回る?）、ト短調・ハ短調などの調性の妙、デモーニッシュなど、「モーツァルト常套手法」みたいなものがあるが、オペラを観ていくと、ごく自然にそれらが「こういうことじゃないのか?」と納得することがある。さらに歌唱も備わるため、作曲者の音への感情移入が真っ直ぐに感じられる。

また、粋なレチタティーヴォにも味わいがある。特にドン・ジョバンニのアリアの間にあしられたチェンバロ伴奏のレチタティーヴォは、登場人物の微妙な心理を写し出す。隅々までモーツァルトの醍醐味はやはりオペラで、ということになる訳である。

演奏時間は例えば『フィガロの結婚』で正味3時間と長期戦になるので、休憩はしっかり取

らないとモタない。そのためロビーには必ず向かうが、様々な地位・関係者の方々の会話や、少し着飾った女性の華やかがある。さらにグラスシャンパンは最近ぐっと高額になってしまったが、心地よく酔える贅沢な雰囲気は、日常とは別の世界を味わえてやはり楽しい。

学生時代のクラシックギターから『魔笛』へ、美声のソプラノ歌手から海外オペラ鑑賞へ、そして4大オペラへと個人的な音の糸をたぐってみたが、そろそろオペラ行脚も終盤の時期を感じている。残る思い入れは一つ、是非とも『後宮よりの逃走』を鑑賞して、モーツァルト5大オペラ鑑賞を完遂したいことである。そのため逃すことのないよう、折を見て年間の海外オペラ公演スケジュールに神経を使っているこの頃である。

## 酒とモツの日々（補遺）

会員番号 K.488 佐藤 滋

こんなはずでは・・・この駄文も50回続けたのでもうお終い、と思ったら今年いっぱい続けるそう。小さなつぶやき、もう少しお付き合い下さい。

私はモーツァルト広場の会員ですが、演歌も好きです。ウェットな世界観がたまりません。でもクラシックファンのなかには演歌を毛嫌にする人も少なくありません。何故なんですよ

う? どちらも音楽なのに。以前もあるアマチュア指揮者の方と車に乗っていて、ラジオから演歌が流れてきたとたん、口汚く罵って消してしまいました。耳に不快なんだそうで。

演歌が好きなことは、クラシック音楽を聴く妨げになるのでしょうか?

私は美空ひばりの全集を2種類所有し、彼女の芸風に心から感嘆しています。例えば「川の

流れのように」では出だしの、知らず知らず～を彼女独特の表現（下から掬い上げるような、絶妙な溜め）によって、歌の人物のこれまでの人生が手探りの旅であったことを聞き手に感じさせます。言葉の響きだけでなく、生々しいニュアンスまでも音楽の中に取り込む芸風はマリア・カラスにもつながる才能でしょう。モーツァルトの歌曲ではシュワルツコップの演奏が知的でバランスの取れた名演として知られていますが、モーツァルトは知性だけでは片付けられない、もっと多面的な人物です。慣習や定説に縛られない新しいモーツァルト像の表現もあり得るのではないのでしょうか？ そして聞き手も柔らかい耳をもって、他の世界にも心を開いて行けたら良いなと思います。

現代は分断の時代です。その主な原因は自分

だけが正しい、それ以外は邪道であり排斥しなければならない、という一方的な考え方です。政治も宗教も、いつの間にか寛容な心を失ってしまいました。せめて音楽という趣味的な分野では、クラシック原理主義に陥らないようにしたいと思います。ジャズも民謡も歌謡曲も演歌も、みんな素晴らしい精神文化なのですから。

シュワルツコップは有名な言葉を残しています。「良い音楽を聴く前と聴いた後では人は変わっていなければならない」

今日はモーツァルト広場最後のサマーコンサートです。どうか短い時間ですが現実の悩みとか、いろんな雑念は振り払って音の世界にたっぷり遊んで下さい。豊かなひとときを満喫したら、さあ！ コン서트前とは違う貴方の新しい日常が始まります。

## 事務局より

私が初めて事務局だよりを書かせていただいたのが2004年の冬。当時のサマーコンサートのアンケート結果について書かれていて、特に久元祐子さんのピアノ演奏に感動したというお声がたくさんありました。あれから20年、元号も変われば環境も変わり当時4歳だった我が家の長男は社会人。長く関われば楽しいこともたくさんあります。一重に加藤

代表をはじめ幹事のみなさま、会員のみなさま、コンサートに参加されたみなさまのおかげです。私自身も昨年から本格的に楽器演奏を再開（Trombone）したので、もう20年吹き続けられるようがんばります。第25回サマーコンサートでも楽しい時間をお過ごしください。

(K.575)